

* 自然神学の社会科学への拡張

1. 自然神学とその歴史的展開
2. 自然神学の拡張と科学論
 - 2-1: 聖書の社会教説
 - 2-2: 聖書の経済・環境思想
 - 2-3: 聖書の政治思想
 - 2-4: 自然神学から社会科学へ
 - 2-5: キリスト教思想と科学技術
 - 2-6: キリスト教思想と生命
 - 2-7: キリスト教思想と脳科学

1/19

<前回>キリスト教思想と科学技術

(1) はじめに

1. 問題状況
 - ・現代世界の基盤としての科学技術
 - ・3・11の東日本大震災における原発事故

↓

「問いとしての科学技術」、あるいは「科学技術の神学」の構築の課題

2. 「キリスト教」、「科学技術」の多様性をどのように扱うか。

↓

- ・聖書テキストから、キリスト教の基本教義を基礎にして
- ・人間存在から科学技術へ（科学技術は人間の営みである）

(2) 人間存在から科学技術へ

3. 聖書の創造物語と存在論あるいは人間学という二つの軸を設定し、両者を繋ぐ。
4. 聖書の創造物語

①神の像／支配（創世記1章）、②土の塵／耕す／命名（創世記2章）、③墮罪（創世記3章）：①と②は、人間存在の有限性、その中で、①は人間存在の善性（伝統的に「創造の善性」）を意味し、②はその善性において成り立つ人間の行為。

土を「耕す」（創世記2章15節）が「技術」に関連し、「命名」（創世記2章19節）が「科学」に直結する人間の行為である。→科学技術の原型というべき営み（世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させる行為）→聖書の人間理解に従えば、科学技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属する。

人間は本来、耕す存在者、つまり「農民」である。（科学技術は、神の創造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということ——「神はお造りなされたすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」（創世記1:31）——からの帰結。）

5. ③：善なる本質の歪曲＝疎外

↓

人間存在：本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統的な存在論的思惟は、聖書の人間理解の哲学的解釈。

6. ティリッヒ：有限性と疎外、本質と実存との二重性→人間的生（＝人間の現実存在）の両義性（ambiguity）。

人間は善と悪の混合体。原発は悪、iPS細胞は善といった議論は可能か、あるいは原

子力について兵器と平和利用の分離・区別は可能か。

7. 科学技術の光の側面：

耕す人（農民）である原初の人アダムに科学技術の原型を見ることができる。とすれば、科学技術とは、世界創造の始めから人間存在に備わっていた営みであり、本来人間の善性に属する。これは、科学技術に基づく人類の文明がそれ自体としては神の肯定の下にあることを意味する。

8. 科学技術の影の側面：聖書における文明批判、その前提としての聖書における墮落物語。しかし、人間存在の影の側面と科学技術との関わりを精密に論じるためには、人間存在の存在論的考察に加えて、歴史的パースペクティブを導入することが必要になる。

10. 近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的変化。

人間存在の両義性における疎外・歪曲の構造的に規定されてはいるが、近代になって顕在化、まさに 20 世紀、劇的な仕方で前面化する。核技術と遺伝子工学。

11. ハンナ・アーレント『人間の条件』

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。」（アーレント、1994、9）

創世記 3 章の墮罪物語は、この「人間の条件」（＝人間存在の有限性）からの脱出の欲望との関わりで解し得る。

12. ティリッヒ『宗教の未来』所収の講義「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」。「宇宙探検が人間そのものに与える影響」と「宇宙探検が人間の自己理解に与える影響」（ティリッヒ、1999、42）とをテーマ化。

宇宙探検はルネサンスから啓蒙主義に至る「水平線の発見」（＝神や人への奉仕のわざにおいてコスモスを支配し変革しようとする傾向）あるいは「円環と垂直線に対する水平線の勝利」と特徴づけられる近代特有の精神動向に属しており、「十九世紀的な世界的進歩への信仰」はこの線上に位置づけられねばならない。

14. 現代文明の不安。両義性の不安の徹底化。

神の祝福としての創造の善性を喪失する危機＝人間が人間でなくなる危険。

15. 科学技術の批判的監視者としての役割。

このためには、科学技術に根本的に規定された文明全体を視野に入れることが必要。科学技術に対するキリスト教的な批判的な眼差しは、科学技術の社会批判（政治と経済）において具体化されねばならない。

16. エリユール (Jacques Ellul, 1912-1994) の一九五四年の『技術社会』上下巻、すぐ書房。
(*La technique ou l'enjeu du siècle*, Economica, 1990 (1954).)

(3) キリスト教思想にとって科学技術とは何か

17. 科学技術の光の面へ。神の創造行為と科学技術との積極的な関係づけをめぐる問題。

賀川豊彦：神と人間との関わり、特に神の摂理と人間の自由との関係性

神の可能性を信じその実現のために行為する人間の働きなしに、神の摂理が自動的に実現すると考えるのは神を機械仕掛けの神にする迷信である。この人間の行為には科学技術も含まれている。

18. 創造論：理神論との相違。

・一回的な天地創造（原初的創造 *creatio originalis*）／世界の存立を支え続ける（継続的

創造 creatio continua) / 世界を完成へと導く (完成する新しい創造 creatio nova)

・第二の創造として救済行為

(4) むすび

26. 科学技術の両義性とそれに対するキリスト教神学の応答・役割の両義性。

最終判断の終末論的留保。

2-6 : キリスト教思想と生命

(1) 聖書

1. 土の塵から生きる者へ (神の息)

人間存在の有限性 (他者へ依存した存在、生かされている)

<創世記2>

7 主なる神は、土 (アダマ) の塵で人 (アダム) を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

2. 現世中心 (現世における生命の充実) と黙示文学 (死後の生)

現在と未来との緊張 → 今の快楽を追求する刹那主義的生か、未来のために現在を犠牲にする生き方か

<マタイ8>

18 イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。19 そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。20 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」21 ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

3. 現世の生命の充実とは? 神との交わり (本来的な人間関係の回復=神の国)

(2) 歴史

4. 人間はいつから人間か? (人間はいつ人間であることをやめるのか?)

随胎・幼児遺棄の問題

5. 「子ども」誕生 → 人権の主体としての幼児

6. だれが、生命をめぐる最終的決断を担うのか?

本人? 家族 (家長・大人)? 世間? 国家? 神?

(3) 思想・現在

7. 現代の問題状況: 生命倫理の発生 → 問いとしての生命

科学技術の進歩と、選択の範囲の拡大 (より自由に): 自己決定原則

8. キリスト教的原則: 生命の最終決定者は神である → 人間の恣意的な判断の禁止

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」(ヨブ記 1:21)

9. 自殺と安楽死

これは、個人の権利の事柄か？ 自分だけで生きているという意味の「個人」の抽象性

10. 脳死・臓器移植をめぐる宗教的問題

①生命の価値を決定するのは誰か。

権利は神に、しかし、人間が責任を問われる

②存在することの意味（創造の善性）。「にもかかわらず」無意味ではない

③他者の死への依存（人間は関係存在である）

11. 欲望の実現は善か？

自由の限界：「他者危害の原則」（他人を傷つけない限りでしか、自己決定権は行使できない）だけでは十分ではない。自由も有限性を免れ得ない

12. 臓器移植を肯定する精神性と宗教

システム以前（システムの根拠）の問題 → 隣人愛

・システムとシステムを支える精神的基盤

< 1 ヨハネ 3 >

16 イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。

↓

ポイント：隣人愛（心情の純粋性）、モデル・規範に照らした合理的判断

13. 安楽死法的前提は何か？ 人権？

14. 遺伝子工学と「人間の条件」の変更可能性

なぜ、クローン技術の人間への適用が禁止されるべきなのか？

・人格の尊厳の侵害？

・神による創造への侵害（人間の越権行為）？

→ これらの論点は十分説得的か。罪とは何か。逸脱し肥大化した欲望。

↓

神の創造行為と進化あるいは科学技術との関係という問題に関連づけられる。

↓

15. フィリップ・ヘフナーの「創造された共同創造者」（the Created Co-Creator）。

人間は神の被造物であるが、神の行為が現実化することに自らの創造的な行為において共同する存在者、神の創造行為に参与する者である。この人間の行為には、科学技術が含まれる。

コール＝ターナーは、「創造された共同創造者」を遺伝子工学についての神学的議論において取り上げている。

「われわれは、科学技術を共同創造として、つまり、創造における人間の協力として考えるとの提案を考察することから始めたい」（Cole-Turner, 1993, 98）、「フィリップ・ヘフナーは、われわれが自らを創造された共同創造者と考えるべきであると論じている」（ibid., 100）、「科学と科学技術は神の持続的な創造的作業に仕えている。」（ibid., 101）

金承哲『神と遺伝子——遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、2009年。

Philip Hefner, “The Evolution of the Created Co-Creator,”

S. Ashina

in: Ted Peters (ed.), *Cosmos as Creation. Theology and Science in Consonance*,
Abingdon, 1989, pp.211-233.

16. 神との共同創造という科学技術の議論：科学技術の両義性の光の面をキリスト教思想において理論化する上で、興味深い論点。

↓

科学技術の積極的な評価・理解、つまり科学技術の良き理解者にして協力者という科学技術への関わり方が、キリスト教神学に求められる。

17. 「創造された共同創造者」の問題点：

創造された共同創造者の議論の弱点の一つは、科学技術の両義性における影の面の理解が欠けていること＝楽観主義を指摘。

「われわれの科学技術は常に罪、搾取、貪欲のふちに立っている」(ibid., 102)にもかかわらず、この楽観主義は、科学技術の実態を認識することができない。

↓

18. 楽観主義の修正。

1) 楽観主義を修正するキリスト教的な視点としての「贖い」。

神が毀損され苦悩する存在を救済する行為が贖いであるとするならば、この贖いに参与する人間の行為、たとえば、科学技術は罪、搾取、貪欲を楽観的に見逃しそれらを助長するのではなく、「苦しみ破壊されたものへ共感において応答する」(ibid., 101)ものとならねばならない。

神の創造行為に参与する科学技術：新しい存在形態を世界にもたらすプロセスを促進する。

神の贖いの行為に参与する科学技術：苦しむ存在（たとえば、自然環境）の苦痛を和らげる。

「科学技術は贖いと創造の関係性において見られねばならない」(ibid.)。

2) 創造と共同創造に登場する隠喩表現についての議論。

現実の科学技術は多様であり、影の側面もさまざま。聖書における神は、農業と密接に関連した隠喩において表現されている。

「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた」(創世記 2:8-9 二章)

「劇的な仕方でもしかかも明白にも、ヤハウエは最初の園丁なのである。造園あるいは農業は創造自体の隠喩である。」(ibid., 103)

↓

隠喩表現は、単なる言葉の飾りではなく、むしろそれによって表現された事柄に価値と正当性を付与し、人間の行動に影響を及ぼす。神が農夫や園丁の行為（技術）を通して働くとするならば、その行為自体が神との関わりで価値あるものと見なされ、宗教的に正当な技術として承認されることになる。

「もしわれわれが神を特定の科学技術を通して働くものとして描くとするならば、われわれはわれわれの目的をその神の目的と合致させることを望むだろう」(ibid., 106)。

↓

すべての科学技術が同等の価値を有するわけではない。特定の科学技術についての批判的な見方は、聖書における隠喩表現という観点からも可能である。

芦名定道「キリスト教思想と宗教言語——象徴・隠喩・テキスト」(京都大学キリスト教
学研究室『キリスト教研究室紀要』第3号、2015年、pp.1-18.)

19. 個々の科学技術に対する評価あるいは関わりは、可能か。

現在のキリスト教思想が直面する問題状況。理論的な考察や分析の蓄積が現代のキリスト教思想には欠如している。自然科学・科学技術の問題を回避するキリスト教思想の伝統がもたらした現状。

「最近の神学的また典礼的な著述家で、神と科学技術を結びつける者はまれである。この沈黙によって、現代の科学技術は神に縁もゆかりもなく、おそらくは神の敵あるいはデーモンでさえあるとの考えが強められているのである。」(ibid.)

20. 「科学技術の神学」の手がかり、そして科学技術に対するキリスト教思想の関わりを責任あるものとする前提としての自然神学の再構築。たとえば、モルトマン『神学的思考の諸経験』。神学者と自然科学の対話の場(共通の場所)を構築する。

芦名定道『自然神学再考』晃洋書房、2007年。

「現代キリスト教思想における自然神学の意義」(京都哲学会『哲学研究』
第596号、2013年、pp.1-23.)

A・E・マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の展開』教文館、
2011年。

モルトマン『科学と知恵——自然科学と神学の対話』教文館、2007年(原著2002年)。

<参考文献>

1. 加藤尚武 『脳死・クローン・遺伝子治療—バイオエシックスの練習問題』PHP新書。
2. 福本英子 『生物医学時代の生と死』技術と人間。
3. 塚崎智、加茂直樹編 『生命倫理の現在』世界思想社。
4. 東方敬信編 『キリスト教と生命倫理』日本基督教団出版局。
5. 関根清三編 『死生観と生命倫理』東京大学出版局。
6. 小松美彦・土井健司編 『宗教と生命倫理』ナカニシヤ書店。
7. ジェームズ・ヒルマン 『自殺と魂』創元社。
8. 波平恵美子 『医療人類学入門』朝日新聞社。
9. 大林浩 『死と永遠の生命 そのキリスト教的理解と歴史的背景』ヨルダン社。
10. 金承哲 『神と遺伝子』教文館。